

Title	特集：『資本論』数理化研究の最先端：序
Sub Title	Frontier of mathematical Marxian economics : preface
Author	大西, 広(Onishi, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2017
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.110, No.2 (2017. 7) ,p.97(1)- 98(2)
JaLC DOI	10.14991/001.20170701-0001
Abstract	
Notes	特集：『資本論』数理化研究の最先端
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20170701-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集：『資本論』数理化研究の最先端

大西 広*

2017 年はマルクスの『資本論』第 1 巻初版が出版されてちょうど 150 年目の年となり、また翌 2018 年はマルクス生誕 200 年となるため、世界中で記念行事が計画されている。このため、慶應義塾でも世界の諸行事に先だって記念行事をと、2017 年 3 月 19 日に経済学会主催のミニ・コンファレンスを開催した。本特集の 5 本の論文はその際の報告論文とそれへのコメントを文章化したものである。この機会に慶應義塾としても記念事業を開催できたことを嬉しく思う。

ただ、ここでは単に「マルクスを記念する」というものにとどまらず、「数理化」という筋でこの分野の最先端の議論を国際的に行えたことを特記しておきたい。慶應義塾には「数理マルクス経済学」の伝統がずっと存在したわけではないが、数学を重視する経済学部学部の学風に合った企画と理解していただければ幸いである。この方向でマルクス経済学を研究している院生・学生も増えており、新たな伝統を作る出発点となるものと期待している。

それからもうひとつ、今回の記念事業は「マルクス」一般を記念するものではなく、『資本論』初版出版 150 年を記念するものなので、テーマは『資本論』に関わる諸論点に絞っている。マルクス経済学には『資本論』の課題を超えるテーマも多いが、ここは禁欲した。というより、経済学には無限の興味深いテーマがあり、多くのマルクス経済学者はそれぞれに取り組んでいるが、それでもそれらの中で『資本論』が課題とした事柄の重要性は別格だとマルクス自身も認識していたからである。

このことを本コンファレンスのコーディネーターである私の言葉で表現すると、次のようになる。すなわち、市民革命によって成立した自由平等の市場経済社会には「身分」がなく、かつ商品交換は基本的に等価交換となるから誰かに一方的な不当な利益が発生することはない。が、実はそれは見かけのことにすぎず、等価交換の世界でも労働の搾取は成立する。これが「資本主義」なのであって、この認識を何よりもまず前提に現前の資本主義を理解しなければならないとするのが『資本論』である。そのような認識なしには、マルクスはこの著作にあれだけの特別な努力を傾けることはなかったのである。

* 慶應義塾大学経済学部

したがって、ここで議論するのは「資本主義一般」の問題であって、そこには独占も帝国主義も独裁政治も「金融化」もない。ただ、資本主義が成立して以降のすべての社会に共通する、そしてもちろん資本主義が支配しているすべての国に共通する「資本主義一般」の運動法則を議論するものである。

こうした目的で行われた4本の報告は、「基調報告」としての性格を持つ冒頭の私のものを除くと、基本的には3つの分野に亘っている。私の報告に続く泉・戴・李論文は「労働価値計算の最先端」の分野を、続く柳論文は「価値と価格」およびその両者をつなぐ変換係数とされる「労働時間の貨幣表現（MELT）」に関わる問題を、そして最後の関根論文は全く新たな新機軸として開発されつつある『資本論』大工業論の数理モデルを扱っている。また、最後から2本目の森本論文はミニ・コンファレンスにおいて柳報告に対して行われたコメントを整理・展開したものである。読者の検討をお願いしたい。

なお、本ミニ・コンファレンスには慶應義塾経済学会から多大な資金援助をいただいている。記して感謝したい。

経済学会ミニ・コンファレンスプログラム

1. タイトル：「『資本論』数理化研究の最先端」

2. 日時：2017年3月19日（日）10:00–17:00

3. 場所：三田キャンパス研究室棟A会議室

4. 報告タイトルと報告者および討論者

「基調報告——マルクス派最適成長論の諸次元」 大西 広（慶應義塾大学教授）

「国際産業連関表による全労働生産性の計測」 泉 弘志（大阪経済大学名誉教授）

討論者 橋本貴彦（立命館大学准教授）

「労働生産性と価値計算」 柳 東民（忠南大学校教授）

討論者 森本壮亮（桃山学院大学専任講師）

「『資本論』における大工業論の数理的展開」 関根順一（九州産業大学教授）

討論者 大西 広（慶應義塾大学教授）